

「地域の中で学び、発信する」態度の育成を目指した 総合的な学習の時間における防災学習

柳井市立柳井西中学校での実践

楮原 京子

Disaster prevention education as part of the Periods for Integrated Study, aiming to develop an attitude of
“learning and communicating in the community”

KAGOHARA Kyoko

(Received December 15, 2021)

キーワード：総合的な学習の時間、防災学習、地域連携、地理院地図、古地図

はじめに

文部科学省（2011、2013）は、東日本大震災における学校現場の課題や教訓を受け、生きる力を育む防災教育の展開として児童生徒の発達段階に応じた防災教育の重要性を提示し、学習指導要領には多数の教科に「防災」を取り扱う（あるいは防災と関連する）単元が設けられた。こうした背景や近年続発している自然災害を受け、学校教育における防災授業の重要性や期待も高まりをみせている。また、その実践は、教科の中で探究的な活動として実践するものや、特別活動、総合的な学習の時間で学校と地域との協働を交えて実践するものなど、多岐に及んでいる（権田・今井、2014；坂本・松本、2018；佐藤ほか、2018；北崎、2020など）。それは、「防災」が教科横断的であるという特性の表れでもあり、教員の裁量で授業を柔軟に構成できる良さがある一方で、防災に対する知識や経験不足から、何をしたらよいのかを悩む教員が少なくない。加えて、校区や居住地を対象とする防災学習では、一般的な教科書や資料集で当該校区や居住地が取り扱われることは稀なため、教材を教員が一から構想・作成する必要があり、その負担は大きい。特に山口県の場合、国土交通省管轄の河川が少ないため「治水地形分類図」の整備地域が限られている。したがって、地域の旧河道や自然堤防、扇状地、台地という地形は、教員自らが読み取ることをしなくてはならない。

本稿では、自然地理学・地形学を専門とする筆者が、公立中学校の総合的な学習の時間において実践した防災学習について報告する。また、実践内容とその効果、課題については、生徒のワークシートや実践校教員との振り返りを踏まえ考察する。

1. 防災学習のねらいと構成—総合的な学習の時間における位置づけ

実践校である山口県柳井市立柳井西中学校は、「しなやかな心と確かな学力を身につけ、志をもった生徒の育成」を教育目標に、2021年度は「地域の中で学び、発信する」をテーマに総合的な学習を展開することを計画していた。中学校学習指導要領第4章において総合的な学習の時間の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」とあり柳井西中学校における防災学習は、この目標達成に合致する活動である。防災学習に充てられた授業時間数は第1学年～第3学年それぞれ6時間である（表1～表3）。

このような枠組みの中、筆者は、災害現象の発生メカニズムや災害への備え・対処を学ぶ防災学習ではな

く、「地域」に根ざした防災学習を展開することを提案した。それは、「地域の中で学び、発信する」態度とは何かを考えたとき、生徒らの生活基盤である「地域」を何気なく見渡しているだけでは、学びの対象と捉えることは難しいが、歴史や文化、自然環境など、地域を構成している事象を知ること、それらがいくつかの必然性や関係性の中で形成されていること、そして、それらと自然災害との「つながり」を生徒が自ら気づけるようになることが、「地域の中で学ぶ」防災学習の重要性ではないかと考えたからである。また、本活動を通して得た知見や興味・関心をもとに、家族や地域の人に積極的に話題提供できるようになることを「発信」の目標とした。

表1 第1学年の防災学習実践内容

時	学習内容	協力者
	I 講演を聞く。「地域を知り、防災を学ぶことの大切さ」	大学教員
1 ・ 2	II 地理院地図（資料1）を使い、水害に関わる地域の特徴を把握する。 （1）資料1から新庄・余田地区の河川とH17洪水の浸水範囲を把握する。 （2）資料1から洪水の災害要因を考える。 （3）資料1に危険箇所（予想）を記す。	大学教員 学年部 地域ボランティア
3 ・ 4	III フィールドワークで危険箇所や周囲の情報を収集する。 （1）班に分かれて調査地区に移動する（新庄4地区、余田1地区）。 （2）IIの危険箇所の特徴を把握する。 景観の観察、写真撮影、ヒアリング	大学教員・学年部 地域ボランティア 柳井市下水道課
5 ・ 6	IV オリジナル防災マップ作成する。 （1）地図に収集した写真や情報を付記する。 （2）班の情報を共有する。 V 防災マップをポスターにして地域に発信する。	学年部 地域ボランティア

表2 第2学年の防災学習実践内容

時	学習内容	協力者
1	I 講演を聞く。「地域を知り、防災を学ぶことの大切さ」	大学教員
2 ・ 3	II 古地図を使い、まちの変遷と災害について考える。 （1）講演を聞く。「新庄・余田地区の地形の変化」 （2）新庄・余田地区の社会変遷を新旧地形図から把握する。	柳井市教育委員会 大学教員 学年部
4 6	III 地域と災害について調査する。 （1）班でテーマを設定し探究する。 （2）調べたことをポスターにまとめる。	学年部 社会科教員

表3 第3学年の防災学習実践内容

時	学習内容	協力者
1	I 講演を聞く。「地域を知り、防災を学ぶことの大切さ」	大学教員
2 ・ 3	II 自助について学ぶ。 （1）災害が起きたらあなたはどうか行動するか。 （2）避難生活を送るための備えを学ぼう。	柳井市危機管理課 学年部
4 6	未 III 共助について学ぶ。 （1）避難所での生活について学ぼう。 施 IV 家庭や地域の防災に役立つテーマを調べてまとめる。	-

防災学習は、生徒の発達段階（1年生から3年生へと自然災害や地域への理解が進んでいくこと）に合わせた授業テーマと構成を考えた（図1）。具体的には、第1学年では、地域で発生した自然災害を知る（災害の自然的条件の理解）、第2学年では、地域で発生する自然災害が変容することを知る（災害の社会的条件の理解）、第3学年では、地域で災害が発生したとき、自らが活躍できることを知る、をねらいとした。学習活動には、フィールドワーク、アナグリフ（赤青メガネを使用することで立体的にみえる画像）や地図を用いた活動を組み込み、生徒の学びの意欲や好奇心が低下しないような学習方法について検討を重ねて授業計画・指導案の策定を進めた。検討段階においては、GIGAスクール構想の下、中学校に整備されたインターネット環境と1人1台のiPadを活用してGoogle Earth Projectによる防災マップ作成を提案したが、大勢の生徒が集まることのできる体育館や多目的ホールではWi-Fiが入らなかったり、Google Workspaceの習熟にもう少し時間が必要であったりと実践することが困難であることが分かったため、Google Earth Projectによる防災マップ作りは断念した。なお、1年生はフィールドワーク時の動画、静止画の記録にiPadを使用し、2年生はインターネットを通して、市のハザードマップ検索や地理院地図、J-SHISを活用した学習活動を行った。ICTを活用したフィールドワークと防災マップ作りの事例としては、畠山ほか（2020）などがある。次章では、筆者が実践者となった防災講演と地図を活用した活動について詳述する。

1年生 地域で発生した自然災害を知る

- ・どのような災害だったのか、どのような場所で被害が大きかったのかを知る。
- ・被害が大きくなりやすい地域の地形的特徴を見つけ出す。
- ・地域の方から過去の災害の様子を聞き、災害への理解と地域とのコミュニケーションを図る。

2年生 地域で発生する自然災害が変容することを知る

- ・長期的にみて（過去数百年～千年間）、まちがどのように移り変わってきたのか知る。（講話・新旧地形図の比較）
- ・自然災害に対して、脆弱な地域が増えてきたこと、昔は生じなかった被害が現在になって増えたことを理解する。
- ・現状を受けて、まちにはどのような対策があるか、地域への意欲・関心を高める。

3年生 地域で災害が発生したとき、自らが活躍できることを知る

- ・釜石の奇跡は、中学生と地域の方々の連携がおこした奇跡であることを知る。
- ・避難スイッチを押せるか、知識はいざというときに使えるか、確認する。
- ・災害時には、優先した避難行動ができるようになる（そうした意識を持つ）。

図1 柳井西中学校における学年に応じた授業のねらい

2. 防災学習の実践

2-1 動機づけの防災講演

柳井西中学校の生徒にとって、2021年度になって「防災」と冠する学習活動を行うのは、本実践が最初であったことから、第1学年～第3学年、それぞれに防災講演を行った（表1～表3のI）。講師は筆者が務めた。この講演では、生徒に向けて簡単な自然災害の定義について説明した後、「自分は今から1ヶ月の間に大災害にあわないと思う」かについて「はい」か「いいえ」の二者択一で問うた（図2）。この問いの意図は、「災害はいつ来るか分からない」ということを印象づけることである。過去の災害の被災者の多くは、おそらく災害が起きる1日前まで、自分は「災害」とは無関係とまで思っていたらうし、災害後、壊滅した家や街をみながら「まさか、こんなことになるなんて・・・」と思ったに違いない。自然災害をもたらす現象は食い止めることができないからこそ、対峙する時のために「命を守る」備えをしなくてはならないことを伝えた。次の問いとしては、では、「命を守る備え」とはどのようなものかを考えてもらった。多くの生徒は「非常持出袋を準備しておく」「避難場所を確認しておく」といった回答であった。その回答に対して、筆者は「非常持出袋には、何を入れますか？」「避難場所まではどのようにいきますか？」など、いざという時をより具体的に想像するように導き、その「想像力」が大切であることを伝えた。そして、「知

る」ということも「備え」のひとつであることを付け加えた。以上が第1学年～第3学年共通の導入である。その後の展開は、学年毎の目標に応じて、以下のように分けた。

第1学年は、地域で頻発しやすい自然災害について自然的条件から理解すること、地域との協働を図ることをねらいとした。そのための教材として平成17年に発生した水害（洪水氾濫）の写真を提示し、校区内（新庄・余田地区）でも水害が発生した過去があり、そのような水害が、どのように発生するのか、そのメカニズムや発生しやすい場所の条件について解説した。そして、地域で過去に発生した水害について、地図作業（表1のII）やフィールドワーク（表1のIII）で学んでいく計画であることを伝えた。

第2学年は、地域の自然災害について社会的条件から理解することをねらいとした。特に、2年生はこの防災学習の前に「長溝」（近世に新庄・余田地区の水不足を解消するためにつくられた用水路）について学んでいたことから、長期的な社会の変遷、つまり、地域の歴史をたどりながら、社会のしくみや土地利用など、まちの様子が変わると自然災害への耐性、被害状況が変わることを解説した。なお、2年生には、次回以降に古地図を用いた活動（表2のII）を実施することから、防災講演（表2のI）では、2011年東北地方太平洋沖地震での旧河道・旧湖沼における液状化被害や、2014年豪雨における広島市内での土砂災害について解説した。

第3学年は、防災キャンプを控えていることもあり、「自助・共助」の精神や災害時に自分たちは地域の助けとなる存在であることを意識してもらうことをねらいとした。そのための題材として「釜石の奇跡」と「避難スイッチ」について解説した。そして、釜石の奇跡の裏には、中学生らの高い防災意識と地域との深いつながり（地域ぐるみの助け合い）があったことなどを伝えた。そして、講演最後の質問として「災害のときにあなたを守り、助けてくれるのは誰でしょうか？」を提示し、解答として「自分」であることを示した。災害時には、まずは自分が助かること、そして率先避難者となって地域の人を助けてほしい、そうした筆者の願いを伝えたいつもりである。

以上のように、講演の内容は、導入を同じとしながらも、各学年それぞれの発達段階やそれを見据えて設定したねらいを鑑みた展開とし、その後の活動への動機づけになるよう考慮した。



図2 「自分はこれから1ヶ月の間に大災害にあわないと思う」に答える生徒

1年生（左）よりも2年生（右）の方が多く挙手しており、災害を身近に感じているようである。

2-2 地図を活用した活動

第1学年と第2学年については、それぞれのテーマに応じて地図を活用した活動を講演後に取り入れた（表1および表2のII）。

1年生は、前節の防災講演と同じ日に、その後に計画していたフィールドワークの下準備として、班毎に分かれて、校区の浸水履歴図を作成した（図3）。筆者らが準備したものは、柳井市ハザードマップ、柳井市ハザードマップの校区範囲をA3サイズ白黒で印刷したもの、同範囲の標高段彩図と陰影起伏図（アナグリフ）、赤青メガネである。標高段彩図と陰影起伏図は地理院タイルを用いて作成した。この作業でのねらいは、洪水氾濫で被災しやすい場所は、一般に周囲より低く平らな土地、水はけの悪い土地、河川が合流する場所などであることを理解することである。当初は等高線やアナグリフの判読から、生徒に上記の条件に当てはまる領域を抽出してもらうことを考えたが、既習内容や地図作業の慣れ具合を勘案し、今回は柳井市ハ

ハザードマップを参照し、過去に被災した地域の地形的特徴を考えてもらう活動とした。手順としては、A3サイズの地図上に河川と平成17年水害の浸水範囲を塗色し、次にその図を標高段彩図やアナグリフと照らし合わせることで、浸水範囲の地形的特徴を読み取らせた。この作業では、フィールドワークで生徒を引率する地域ボランティアにも班に入ってもらった。ある班を担当したボランティアさんは、防災士の資格を持ち、平成17年水害を経験した方であったので、丁寧に当時の様子を生徒に紹介していた。こうした地域の災害体験者からの話は、生徒に与える印象も強く、生徒と地域を繋ぐ学習として有効である。

2年生は、前節の防災講演から3ヶ月後（9月）に、柳井市教育委員会社会教育指導員・松島幸夫氏による近世の絵図などを用いた講演「新庄と余田における地形変化」を聴講した後、時代の異なる地形図の比較から、柳井市や自分の家の周りがどのように変化したのかを読み取る作業を実施した（図3）。筆者らが準備したものは、校区を包含する範囲の明治43年発行地形図（旧版地形図）、同範囲の最近の地形図（淡色地図）、標高段彩図、陰影起伏図である。淡色地図・標高段彩図・陰影起伏図は地理院タイルを用いて作成し、旧版地形図も含めて、いずれの地図も重ね合わせが可能なようにGIS（地理情報システム）で投影法と縮尺を統一し、トレーシングペーパーに印刷した。その後、班毎に、まちが変化したことによって自然災害の被害状況はどのように変わったか考える時間をとった。

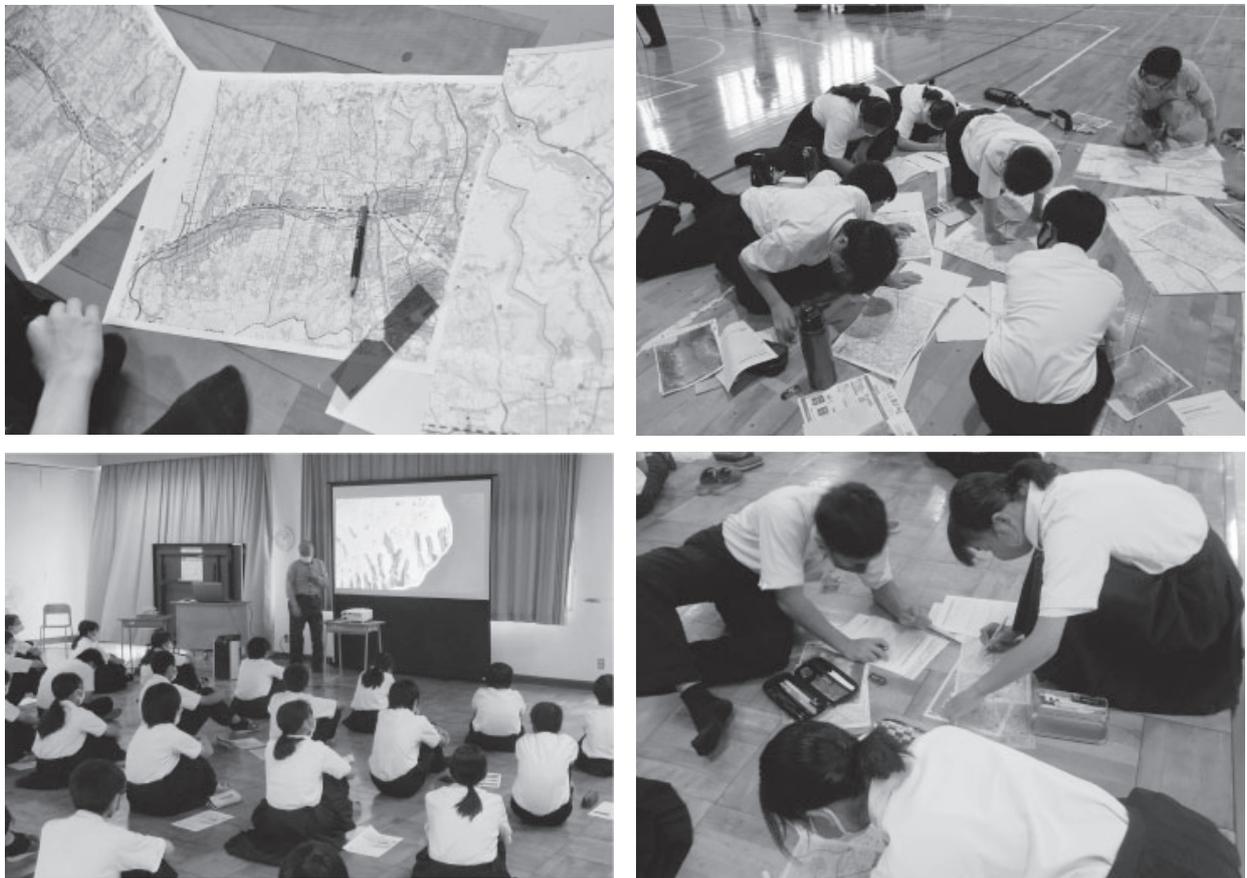


図3 地図を活用した活動の様子

上段：1年生の活動。標高段彩図やアナグリフ、ハザードマップ（左）を使いながら、地域ボランティアと話し合いながら浸水範囲を赤色で塗っている（右）。下段：2年生の活動。普段、目にしない絵図を用いた解説（左）とトレーシングペーパーに印刷された旧版地形図などを参考に、かつて海だった範囲やまちの改変した箇所を読み取っている（右）。

2-3 その他の活動

前述の活動の後、とりまとめまで生徒が、どのような学習活動を行ったのかを簡潔に述べておく。1年生は前節の地図を活用した活動の3ヶ月後（9月）にフィールドワークを行った。フィールドワークでは、校区内を5箇所に分け、地域ボランティア引率のもと、平成17年水害の様子聞き取りや景観の読み取り、市

のポンプ施設見学を行った。計画では筆者も帯同する予定であったが、雨天延期により参加がかなわなかった。フィールドワークの後、一連の防災学習で学んだことや自分たちで調べたことをポスターにまとめ、文化祭（10月）で発表した。

2年生は前節の地図を活用した活動の後、地図作業や講演の内容などを参考にしながら、地域の防災に関して班毎にテーマを設定して、更なる調査とポスターへのとりまとめを行った。ポスターは文化祭で掲示され、その後1年生のポスターと共に、約1.5ヶ月間、新庄および余田公民館で展示されることとなった。

3年生は前述の防災講演の後、予定していた防災キャンプが中止となり、しばらく防災授業から離れていたが、10月に柳井市危機管理課・河村健次氏を講師として、自助・公助をテーマとする講演を聴講した。

3. 生徒の感想からみた活動の考察

ここでは、前述の2-1および2-2の活動が、生徒の意識や考え方にどのような影響を及ぼしたのか、生徒の感想から考察する。回答数は1年生が40、2年生が28、3年生が31であった。第1学年～第3学年のいずれも事前の備えが大切であるとの回答が多く、その備えとしては避難場所や避難経路を確認し、防災グッズを準備するとの記載が大半であった。しかし、1年生と3年生はこうした行動を家族と話したいと答える傾向が強く、2年生は「想像力」や「ハザードマップ」をキーワードとして使った回答が多かった。1年生は柳井市ハザードマップに付属している避難カードへの記入を活動内に取り入れたことが影響しているが、3年生については、「釜石の奇跡」を伝えたことで、避難する際に家族と一緒にであるとは限らないという想像が働いたのではないかと推察される。2年生については、講演冒頭での解説の印象が強く残ったのではないかと推察される。

1年生については、およそ4割の生徒から、身近な地域でも災害が起こること、地域の水害（氾濫）が発生した要因についての理解を示す記述がみられ、地図作業を通して、自分たちが暮らしている地域に標高が低いところが広がっていることを実感している記述や、そうした気づきからフィールドワークへの意欲へとつながっている生徒もいることが分かった。このように講演と地図作業を通して、1年生が地域の災害について調べようとする興味・関心が高まった様子が読み取れる。

2年生については、およそ5割の生徒から「人が住む場所などを変えることによって災害が起こるときが変わる」「土地の改変によって危ない場所が分かりにくくなってしまった」などと、災害が起こる場所に関して、土地の変遷という視点に着目した回答がみられ、柳井市の昔はどのような姿だったのかに興味を持ったのではないだろうか。また、「今回学んだ知識は、家族や地域の人にも教えてあげて、どんどん広めていきたい」などの回答からも、生徒の中には、他者に伝えたいと思う生徒もおり、こうした意欲を上手くつなげられる活動を計画することも、生徒の学びにとって重要であると感じた。

3年生については、最後の問いが印象的であったのか、およそ4割の生徒が「自分の命は自分で守る」「自助が大切」と回答した。一方、釜石の生徒らの行動との比較をしてか、「自分は防災意識が低い」と振り返る生徒もいた。3年生については、講演の後に防災キャンプを控えていたが、そうした大がかりな活動でなくても避難訓練と抱き合わせた活動とすることで、得た知識を実際に使える知識へと発展させることができるのではないかと感じた。また、「『釜石の奇跡』のように地域の人々と助け合いのできる地域を目指したい」「西中の周辺にはお年寄りの方が多いので、その方々への声かけも大事」などのように地域を担う一員である意識を持ち始めた生徒も1・2年生よりも多い印象を受けた。

以上のように、前述の2-1および2-2の活動を振り返ると、筆者らがねらいとした学習を生徒は実践できているように思われる。生徒は東日本大震災や西日本豪雨を例とした事例の紹介であっても、自分たちが住む地域ではどうかという想像をし、地域を知りたいという意欲をみせた。そうした動きは、柳井西中学校の総合的な学習において目標とした態度の育成にとって重要な変化であったと思われる。しかし、後述のように、とりまとめまでの活動には課題が残った。今後は、講演や地図を用いた活動を通して、生徒の中で高まった防災への興味・関心・意欲を、次の活動に生かせるよう、そのつなぎ方を工夫していきたい。

4. 実践校教員との振り返り

11月24日に柳井西中学校の教員と本実践の振り返りを行った。ここでは、第1学年と第2学年に分かれて

学習活動を振り返った後、その気づきを全体で共有した。

第1学年では、下準備（視覚的に地形的特徴を読み取りやすいアナグリフ画像や標高段彩図を準備していたこと）を丁寧にすることによって、普段の授業で内容理解に困難さのある生徒であっても、実際に水没した様子を写真でみて、地図で水没した箇所を色分けしてみると、目を見た情報を基にして学習することができた。そのことによって生徒の「こういう所が危険なんだな、実際にいって調べてみよう」という言動に結びついてきたと気づきが報告された。しかし、こうした下準備をしっかりとしていたにもかかわらず、フィールドワークでは、生徒の主体的な言動が薄れた印象があったことが報告された。加えて、教員からは、その大きな要因として、地図を活用した活動とフィールドワークの間に数ヶ月もの期間が空いてしまったことが挙げられ、長く時間を空けてしまったために生徒の意識が低下し、フィールドワークで何を見聞きすればよかったのか、どのような点を調べればよいのかが曖昧となってしまったのではないかと指摘を受けた。筆者も防災学習のスケジュールに関しては、難があることには気づいていたが、年次計画が進行している時点での変更は、困難であったと推察する。

そして、上記の反省点を踏まえた改善点について、活動間の時間が空いたとしても生徒に目的意識を持たせる（復活させる）手段として、生徒にとってより身近な地域を割り当てる、フィールドワーク冒頭でブリーフィングを行う、引率者である地域ボランティアに注意を促してもらうなどが挙げられた。今後は、事前にフィールドワークでどのような点に着目するのか、教員と地域ボランティア間でしっかりと情報を共有しておくことで、上記の課題は解決に向かうように思われる。さらに、今回のような実践をもう一度行うのであれば、その時期を検討した方がよいとの意見があった。具体的には、夏休み直前に第1回目の防災授業を実施し、生徒に防災に関する基本的な知識と防災学習（フィールドワーク）への意識づけをし、夏休みに課題として、防災に関して家族や親戚・近隣住民への聞き取りや、災害の様子が分かる資料を入手してまとめる。そして、課題をもとにした簡単な振り返りの後、フィールドワークへとつなげていく、というスケジュールである。このようなタイミングで進めることにより、夏休みに調べたこととフィールドワークで学ぶことが結びつき、自分事として学習できるのではないだろうかということであった。いずれにしても、フィールドワークを伴う防災学習は、時間的なゆとりをもって取り組みたいところであるし、生徒がしっかりと調べて地域の災害についての意見や認識が持てた上で、フィールドワークへとつなげていくことが大切であるとの共通認識を持つことができた。

第2学年については、やや話を聞く時間が長く、ほかの活動も取り入れていければよかったという雰囲気があったが、地域の地形と歴史の講話を聞き、いくつかのハザードマップも用いながら、自分たちでテーマを選定してポスターにまとめていく活動を6時間で行ってきたことに関しては、内容と時間のバランスがちょうどよかったとの評価であった。また、ポスターの作成にあたっては、iPadでとってきた資料を印刷して貼って文章を書くというように、ICT機器も活用することができてよかったとのことである。一方、普段、消極的な生徒から災害後の経済的な支援や防災リュックの中身の見直しをテーマとするなど、豊かな発想の発言があり、生徒の別の一面を見ることができたとのことである。ただし、テーマの設定に悩む班は多く、大卒の視点を与えてからテーマを設定させる方が、深く学ぶことにつながったのではないかとのことであった。つまり、主体的な学びのためには、教員側からの程よい支援が大切ではないだろうかという意見である。なお、2年生は前述の通り、ポスターまで作成したものの、発表の機会がなく、まとめて終わってしまった。発表会をすれば、まとめに向けての意欲も向上したであろうし、より積極的に考えることができたのではないだろうかとの反省もあった。

最後の意見交換では、教材やフィールドワークに関しての雑感も含め、今後の実践に役立つ気づきを出しあった。使用した教材（地図）は、生徒が興味を持って活動に取り組んでいた姿からみて、学習への効果も高いと感じたが、地図の見方・捉え方について整理しておくこと、読み取りに困っている生徒がいた場合に助言することができる、とのことで、教員を対象とした読み取りの研修を事前に開いておくことも、生徒の学びを支援する重要な点ではないかと感じた。また、フィールドワークに同行した教員から、「新庄公民館が洪水時に水没しやすい所にあることが分かった。本来避難所となるような場所が一番危険そうなので、なんで？と疑問に思った」との気づきをもらい、こうした発見から、さらに深める学習ができればいいのではないかとのこと、「あなたが市長だったら・・・」と地域の安全対策や支援について考えてみるような活動はどうかと提案があった。振り返りにおける教員との議論は、非常に活発であり、そのような議論ができたのも、教員が防災学習に取り組む生徒の様子をしっかりと観察できたことによるのではないだろうか。ま

た、校長先生より、「今回は柳井西中学校としても初めての取り組みで、教師側も学習者となることができました。今回の経験から、防災学習にあたって、どのようにすればよいのか、教師間で色々と考えを巡らせるようになってきた」との様子もうかがった。その点では、筆者が実践者となることの利点があったと考える。

おわりに

柳井市西中学校における「防災学習」は、緒についたばかりであり、いくつかの課題も表出した。その中でも筆者が認識した第一の反省点は、実践にあたっての計画と体制の未熟さであった。特に年次計画や教科間の進捗等との調整、地域ボランティアとの事前の打ち合わせが不十分であったことで、第1学年の活動で顕著に観察されたように、本来積み上げていく学びである活動どうしのねらいが曖昧となり、生徒の意欲や主体性の低下を招いた可能性がある。防災学習において基礎的な知識の習得の段階から主体的な深い学びへと発展させていくには、それなりの時間数が必要となる。限られた時間の中で効率的かつ効果的な防災学習を運営・実践していくには、カリキュラムマネジメント的視点での検討が重要であると気づかされた。そして、防災学習を振り返り、校長先生は「防災学習は教科の授業と異なり、これによって培われる資質・能力の成果が目に見えて発揮される機会が少ない。しかし、生徒らが生きていく上では、重要な学びであり、継続していくことが求められる」と締め括った。継続していくことは平易ではないが、振り返りにおける教員の積極的な討議からは、次年度以降も防災学習が継続されていく意気を感じる。今回の実践を通して構築された人の縁も大いに活用し、地域コミュニティーや関係機関との連携を強めながら、さまざまな角度から地域の災害を探究していく防災学習に発展すること、そして、その学習活動を通して生徒の意識やそれに基づいた行動に変容が生じることを期待したい。

謝辞

本実践は、山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻・渡邊真弥子氏から、筆者が防災学習についての相談を受けたことに端を発する。学校現場において防災授業を運営していく難しさを感じておりながら、手を差し伸べる事ができていなかった筆者にとって、このことは絶好機であった。渡邊氏からは、本稿執筆に必要な資料・データの提供もいただき、指導教員である時乗順一郎先生には、本稿をまとめるにあたっての便宜を図っていただいた。実践では、柳井市立柳井西中学校赤道久嘉校長をはじめとする諸先生のご助力を賜り、活動の様子を収めた写真の提供もいただいた。また、実践に際しては、柳井西中学校の他、柳井市危機管理課および下水道課、柳井市教育委員会、地域ボランティアの方々のご理解とご協力を賜った。関係のみなさまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 権田与志道・今井幸彦（2014）：中学校社会科における防災教育の実践—地理・歴史・公民の分野連携を目指して—, 新地理, 62-3, 43-60.
- 畠山久・永井正洋・室田真男（2020）：フィールドワークを通じた防災マップ作成活動における学習活動のデザインとその効果の検討, 日本科学教育学会研究会研究報告, 35-3, 53-58.
- 北崎幸之助（2020）：中学校における旅行者視点の防災・減災教育の実践—神奈川県鎌倉市の校外学習を例として—, 新地理, 68-1, 1-12.
- 文部科学省（2011）：今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）, 130p.
- 文部科学省（2013）：学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開, 223p.
- 坂本昌弥・松本隆一（2018）：防災・減災のための中学校における総合的な学習の時間～熊本地震を事例として～, 心理・教育・福祉研究, 17, 1-10.
- 佐藤公治・木村玲欧・林春男（2018）：生徒が主体的に取り組む「避難所運営訓練」によって「生きる力」を育む体験的防災教育プログラムの提案:一宮城県南三陸町立志津川中学校での試み—, 地域安全学会論文集, 33, 313-323.